

ヨセフスにおける第四哲学党*

新 井 佑 造

I

第四哲学党の創設者であるガリラヤ人ユダの反乱については、フラウィウス・ヨセフス¹⁾がいかに使徒行伝5章のいわゆる Gamaliel-Rede のなかでも言及されている²⁾が、第四哲学党について言及しているのはヨセフスだけである。

「第四哲学」という表現は、第1に「ユダヤ古代誌」18, 9において *τετάρτην φιλοσοφίαν* すなわち「第四の哲学」、第2に「ユダヤ古代誌」18, 23において *τετάρτη τῶν φιλοσοφῶν* すなわち「哲学の第四のもの」、第3に明確には第四哲学とは表現されてはいないが、上記の並行記事から第四哲学と同定できる「ユダヤ戦記」2, 118における *ἰδίας αἱρέσεως* すなわち「彼自身の学派（またはセクト）」、以上の3箇所だけである。

さて、「第四哲学」とはいったい何なのであろうか。これは「ユダヤ戦記」、「ユダヤ古代誌」の執筆動機と深く関連している。

ヨセフスは紀元75～79年に7巻の「ユダヤ戦記」（以下「戦記」と略記する）を、また紀元93～94年に20巻の「ユダヤ古代誌」（以下「古代誌」と略記する）を公けにしているが、「戦記」1, 1-30序章において、また「古代誌」1, 1-7序章において、それぞれの著書の執筆動機を述べている。

ヨセフスによれば「戦記」は、小国ユダヤが強大な権力と軍勢力とをもったローマに反抗することは無益なことであるので、ディアスポラのユダヤ人の間に今後、対ローマの反乱が起こらないように³⁾と、さらにユダヤ戦争をひきおこしエルサレムの破壊と神殿の崩壊とを招いたのはユダヤの一部の無謀な革命分子であるとして、彼らの犠牲となったユダヤの人々を慰めるために⁴⁾執筆された。「古代誌」は、ユダヤ人の父祖以来の伝統や宗教や道徳が他国のそれら

に比べて決して劣るものでなく、むしろいかにすぐれたものであるかを⁹⁾、また本質的には共通の普遍性をもつことを、ギリシャ・ローマ世界に弁証するに¹⁰⁾執筆された。もちろん、後者の「古代誌」におけるユダヤ人の伝統や宗教に対する弁証は前者の「戦記」においても忘れられてはいない¹¹⁾。

以上のような執筆動機に基づいて、ヨセフスはユダヤ人の思想的潮流をギリシャ・ローマ世界の読者に理解させるために、ギリシャ哲学とのアナロジーを用いて紹介した。パリサイ派を第一の哲学派、サドカイ派を第二の哲学派、エッセネ派を第三の哲学派、そしてガリラヤ人ユダのセクトを第四の哲学派と名づけたのである¹²⁾。

II

紀元6年に、ユダヤ全土とサマリヤおよびイドゥマヤの国守 (*ἐθναρχης*) アルケラオス¹³⁾は、ガリアの町ピエンナに追放された¹⁴⁾。彼の領地はローマ皇帝直属のシリア属領州の一部となり¹⁵⁾、皇帝アウグストゥスの命令をうけたシリア総督キリニウス¹⁶⁾が、ユダヤ地方総督コポニウス¹⁷⁾と共にユダヤに赴き、税額査定を目的とした人口調査を実施した¹⁸⁾。この人口調査に反対して立ちあがったのがガリラヤ人ユダであった¹⁹⁾。

ヨセフスは「戦記」2, 118において、次のように述べている。

彼(すなわち、コポニウス)の統治下で、ユダとよばれたガリラヤ人は同郷の者たちにローマ人への納税に同意し、また神のみを主としているのに死すべき人間(すなわち、アウグストゥス)を主(*δεσπότης*)として認めるとは卑怯者であると非難して、反乱にかりたてた。彼(ユダ)は他のセクトとはまったく共通点をもたない彼自身のセクト(*ἰδίας αἰρέσεως*)を創設したソフィスト(賢者)(*σοφιστής*)であった。

「戦記」では、このあとユダヤ人の三つの哲学派であるパリサイ派(b 2, 162-163)、サドカイ派(b 2, 164-166)、エッセネ派(b 2, 119-161)についての紹介があるが、ガリラヤ人ユダの創設した彼自身の新しいセクトについて

は何の説明もなければ、また他の三つの派のような固有の名称も与えられていない。

これに対して「古代誌」においては、「戦記」にくらべていくつかの相違点はあるが、より詳細にユダの運動の性格が報告されており、またそのセクトの名称も与えられている。「古代誌」18, 4-10ならびに18, 23-24においてであるが、反乱のおこった経緯を理解するためにその序文に相当するものを含めて、テキストは次のようなものである。なお、訳は直訳でなく意識である。

ローマの元老院議員で執政官にまでなったキリニウスはカイサルによってシリアの支配者 (*δικαιοδότης*) に任命され、その国の財産査定のためシリアへと派遣された。彼と共にコポニウスがユダヤ人を統治するために全権を委任されてユダヤに派遣された。キリニウスはまた、ユダヤ人の財産を査定し、アルケラオスの財産を処分するために、シリアの属領州の一部となったユダヤにやってきた。ユダヤ人は最初、財産査定を聞いて衝撃をうけたが、ボエスの子で大祭司のヨアザルの説得によって次第に同意し、それ以上の反対はしなかった¹⁶⁾。

しかし、ガマラの町出身のガウラニティス人ユダがパリサイ派のツァドクと共に反乱をおこした。彼らは人口調査が奴隷状態をもたらす以外の何ものでもなく、自由を守ろうと国民に呼びかけた。……さらにそうした自由を守るために熱心であるなら、神はその目標実現のためにわれわれを熱心に助けるであろうと主張した。……人々が彼らの訴えを聞いて呼応したので、大胆に抗議する試みは大いに進展した。これらの二人はありとあらゆる種類の災難の種をまき、それらは言葉では言いあらわせないくらいの影響を民に与えた。争いは激しくなるばかりで、困難を軽減してくれた友人たちは失われ、盗賊に襲撃されて、最高の身分にあった人々は暗殺された。……ついに神の神殿そのものが、この反乱¹⁷⁾によって敵の戦火によって破壊された。父祖以来の伝統は大きく変わってしまい、民族のまとまりの破滅につながった。ユダとツァドクはわれわれの間で第四の哲学派(党)を創設し、多くの信奉者を得たので、われわれの国に騒乱を満たし、この従来知られていない哲学

の珍しさゆえに、われわれの国にふりかかった災難の種をまいた¹⁸⁾。

この後、ヨセフスはユダヤ人の三つの哲学派 (*Ἰουδαίους φιλοσοφίας τρεῖς*) について述べた後、「古代誌」18, 23-24 において、それらの三つの哲学派と並列的に第四哲学党の性格を次のように述べている。

ガリラヤ人ユダは第四哲学党を創設してその指導者となった。この党派は他のすべての点でパリサイ派の思想と一致していたが、神が彼らの唯一の支配者であり主であると確信し、自由への不屈の熱情をもっている点でのみ異っていた。彼らはいかなる殺され方をしても何とも思わず、縁者・友人がいかなる人間をも主と呼びさえしないなら、彼らの復讐のことを何とも考えていない。ほとんどの人々はそうした状況のなかでの彼らの毅然とした決意のほどを見ているので、これ以上は語るまい。わたしが彼らについて語ったことが信じられないことに対しては恐れていない。むしろ、この報告が彼らが骨をも刻むほどの苦痛に対して示した無関心さ、冷淡さを過小評価していないかと恐れている。

以上の三つのテキストから「戦記」と「古代誌」との記事に二つの大きな相違点を見出しうる。第1にユダの出身地である。ユダは「古代誌」18, 4 ではガマラという町からきたガウラニティス人¹⁹⁾となっているが、「戦記」2, 118 においても²⁰⁾、「古代誌」18, 23 においても²¹⁾、さらに使徒行伝 5, 37 においても²²⁾ガリラヤ人である²³⁾。第2にユダの創設した第四哲学党が「戦記」では他の三つの派と全く共通点をもたない彼自身のセクトであるとしているのに対して、「古代誌」では自由への不屈の熱情を除いてはパリサイ派と一致しているとなっている。これに関連して、「戦記」にはユダのほかにも共同創設者はあげられていないが、「古代誌」においてはパリサイ派のツァドクがユダと共に第四哲学党の創設者の一人となっている。

第1の、ユダの出身地に関する相違点であるが、結論からいえば、ユダは「ガウラニティスのガマラ²⁴⁾出身のガリラヤ人」であろう。S. Klein はこの相

違点から「古代誌」18, 4をヨセフスの誤りとして、ユダの故郷を上部ガリラヤのガマラであるとし、「ガマラ」と「ガリラヤ人」とを結びつけようと試みている²⁵⁾。しかし、この試みは論拠薄弱で無理なようである。一方、M. Hengelは、ユダは父エゼキアスがヘロデによって捕えられて部下たちと共に処刑された²⁶⁾後、ガリラヤを去ってヘロデの手のとどかぬガリラヤ湖東のガウラニティスのガマラで成長し、その後父の意志を継ぐためにガリラヤへもどったとして、ユダを「ガウラニティスのガマラ出身の『ガリラヤ人』」と考え²⁷⁾、「戦記」と「古代誌」における相違点を説明している。Hengelは「ガリラヤ」に固執して、ユダをガリラヤ生れでガウラニティス育ちとしている。しかし、「多くのユダヤ人がガウラニティスに住み、……ガウラニティスのユダヤ人居住地は、ガリラヤの一部とみなされ、時々彼らはガリラヤ人の中に数えられた²⁸⁾」ことを考えれば、明確にユダの出身地を決定することはできないが、「ガウラニティスのガマラ出身のガリラヤ人」と考えるのは妥当な線であろう²⁹⁾。

次に第2の相違点である第四哲学党とパリサイ派との関連性について考えてみよう。この問題についての考察はユダの思想的立場ならびに、第四哲学党の運動精神を知るうえに重要である。

考察の出発点としてヨセフスがユダを *σοφιστής* と呼んでいる³⁰⁾ことに、かつそれが「ユダヤ戦記」においてであることに注目したい。*σοφιστής* は知者・賢者とでも訳せるがヨセフスにおいてはさらに律法の解釈者・教師の意味を含んでいる³¹⁾。例えば、ヘロデの死の直前エルサレムで父祖の教え（律法）に関する大いなる専門家としての名声を博し、全国民の間で最高の尊敬をあつめていたセポーライオスの子ユダスとマルガロスの子マッティアスという二人の知者（賢者）が *σοφισταί* と呼ばれている³²⁾。彼らは多くの若い学生に律法を講義していたが、ヘロデ王の臨終が近いと聞いて、「今こそ神の栄光のために復讐し父祖の律法を無視して建てられたものを打ちこわす絶好の時だ」といって神殿の大門の上にヘロデがつくった黄金の鷲の像をとりこわすように弟子たちをそそのかした³³⁾。「彼らは弟子たちに、これは冒険であるかもしれないが、父祖の律法のために死ぬのは光栄ではないか。そのために死んだ者の魂は不滅で永遠の喜びをうけるにちがいない³⁴⁾。」しかし結局彼らは弟子たちと共に捕

えられて生きたまゝ火あぶりの刑に処せられた³⁵⁾。これらの二人の賢者たちは上記の「戦記」の並行記事の「古代誌」17, 149には「父祖の律法についてならぶ者のない解釈者³⁶⁾」と呼ばれている。

ガリラヤ人ユダもおそらく律法の解釈者・教師であったと考えられる³⁷⁾。このことはラビ伝承において、ユダが רַבִּי (敬虔な者), בְּנוֹתוֹרַר (トーラーの学徒) と呼ばれている³⁸⁾ことから確かめられる。

以上のことと「古代誌」が伝えるように第四哲学党の創設者のもう一人にパリサイ派のツァドクが参加していたことから、ユダたちのセクトは初めのうちは深くユダヤ・パリサイ派的伝統に根をおろしたグループであり、それはまたパリサイ派のラディカルな一翼を担っていたが、その自由への不屈な熱情と律法への熱心さから次第にパリサイ派から分離して独立のセクトとみなされていた³⁹⁾と考えられよう。

「戦記」において他のセクトとの共通性を全く否定しているのは、おそらく「戦記」の執筆時期とヨセフスの立場にその原因がありそうである⁴⁰⁾。前述のように「戦記」はユダヤ戦争終結の数年後に公けにされた⁴¹⁾が、ハスモニア家の血をひくエルサレムの祭司貴族階級の出身であり⁴²⁾、またパリサイ派の信奉者と自称する⁴³⁾ヨセフスは、ユダヤ戦争をひきおこし、エルサレムと神殿の破壊という民族の最大危機をもたらした張本人ときめつけたゼーロータイヤシカリ⁴⁴⁾の運動の出発点であるガリラヤ人ユダの運動⁴⁵⁾とパリサイ派との関連性を証言するのをためらったのであろう⁴⁶⁾。これに対して「古代誌」においては「戦記」とは執筆事情がだいぶ異っている。「古代誌」の完成時⁴⁷⁾にはヨセフスが恩義を受けたウェスパシアヌスはもちろん、ティトゥスもすでに世を去っており⁴⁸⁾、ローマの立場に立ってローマの政治的意図に基いて執筆された「戦記⁴⁹⁾」に対して、「古代誌」はその政治的意図の要請は後退し、むしろ宗教的・倫理的意図に基いて執筆され⁵⁰⁾、「戦記」にくらべて親ユダヤ的立場が強⁵¹⁾、ユダのゼーロータイ的反乱グループとパリサイ派との関連性⁵²⁾について強いて沈黙する必要がなく、パリサイ派ツァドクが第四哲学党の共同創設者としてあらわれていると考えられる⁵³⁾。

III

さて、この深くユダヤ・パリサイ的伝統に根ざした運動においてユダが提起したテーゼは、何であったのか。それは、モーセの十戒の第一戒を中心とした次の二点の主張にしばられるであろう。

1. イスラエルの民は神ヤハウェのみを主として、神以外のいかなるものも主として認めてはならない⁵⁴⁾。

2. イスラエルの民が異教からの自由を守るために、すなわち神の唯一主権を守るために熱心であるなら、神は積極的に干渉し民に協力して目的を実現させるであろう。

これらのテーゼは、古くから律法の中心であった十戒の第一戒である神の唯一主権をより尖鋭化して⁵⁵⁾第1のテーゼとし、それに律法の教師ユダの律法解釈としての第2のテーゼを付加したものである。これらは第四哲学党の基本的立場を表わすものであり、それ以降第1次ユダヤ戦争まで連綿と続くゼーロータイ独立運動の運動精神の基盤となったものであった⁵⁶⁾。

ユダは、律法の教師として同郷の民に彼らが神の聖なる民として律法に忠実であるように説き、新たに実施されようとしている、異教支配の開始を告げる人口調査はモーセの第一戒に抵触し、神以外の主権者の奴隷になることを意味するので、イスラエルの民はこれに反対してイスラエルの自由を、すなわち神の唯一主権を守ろう、と立ちあがったのである。したがって、彼らの運動は本質的には宗教的であった⁵⁷⁾。しかし、ヨセフスが伝える「神のみが唯一の支配者であり主である⁵⁸⁾」とのユダヤ人の信仰からのみでなく、「アピオンへの反論」2, 165において述べられているように、「イスラエルの国制はすべての主権と権威を神の手におく」*θεοκρατία* すなわち神政政治（神権政治）⁵⁹⁾であることから、イスラエルにおける神の唯一主権の要求は単に宗教上の要求だけにとどまらず、政治的・世俗的領域においても適用されることは当然の帰結であった。それゆえ、ユダの提起したテーゼは *θεοκρατία* の理念のラディカル（根源的）な実現を要求するもので、「古代誌」18, 9で指摘されているように、彼の教えは「いまだかつて一度も聞いたことのない教え（哲学）⁶⁰⁾」であ

り、「父祖の伝統を変えたもの⁶¹⁾」とさえ見られたほど画期的な使信であった。

IV

以上がユダの思想的立場であるが、彼が自らのテーゼをより鮮明に印象深く打ち出すことができ、かつ彼の主張を聞く者により容易に浸透させることができた当時の時代的背景やユダヤ的伝統について考えてみよう。

1. 第1に反乱の直接の原因となった人口調査があるが、イスラエル民族にとっては人口調査そのものが特別な意味をもっていた。すなわち、人口調査は古来神の意志によって実施されるものであった。民数記によると、出エジプトの直後、シナイの荒野でなされた人口調査⁶²⁾も、約束の地に入る前にモアブのシッティムでなされた人口調査⁶³⁾も神の命令によってなされたものであった⁶⁴⁾。神の意志に従って実施された人口調査は単にイスラエルの民の総数を知ることだけに終らず、数えられた者はすべて、おのおのその命のあながいとして聖所のシケルで半シケルを主にささげなければならなかった⁶⁵⁾。これは数えられたイスラエルの民に災の起らないためであった⁶⁶⁾。富める者も貧しい者も均一に半シケルを主にささげることによって神の災いで死ぬことを免れることができたのである⁶⁷⁾。

こうした人口調査の特別な意味を無視して、ダビデが彼の治世の末期に神の命令によらずに彼の独断でなした人口調査⁶⁸⁾に対して、神はその刑罰として疫病を送って、そのために7万人の民が死んだと、サムエル記は伝えている⁶⁹⁾。

さらに、父祖アブラハムへの「子孫を天の星のように、浜べの砂のようにする⁷⁰⁾」との神の約束や、「イスラエルの人々の数は海の砂のように量ることも、数えることもできない⁷¹⁾」という預言者ホセアの言葉も背景となって、Hengel が指摘するように⁷²⁾、当時のイスラエルの民には人口調査は神が自らのために、とくに終りの時のために残しておいた仕事として考えられたのであり、異教主権者の命令による人口調査はとうてい承服できるものではなかった⁷³⁾。

さらに、人口調査の対象になったイスラエルの土地は神から贈られた聖なる土地でありその所有権はあくまで神に属しており、人間が自由に処分すること

ができないものであった⁷⁴⁾。G. von Rad が指摘するように⁷⁵⁾、イスラエルの土地測定は安息年の後に行なわれるべきもので、それはほとんど宗教的行為として認められていたのである。

以上のことからわかるように、イスラエルの民にとって、とくに律法に熱心な人々にとっては皇帝の人口調査はヤハウエの民と土地への異教主権からの重大な侵犯として理解されたのである。

2. こうした人口調査に対するユダヤ人の特別な感情の他に、時代的背景として神と律法に熱心な人々の運動——イスラエルは神以外のいかなるものからも自由でなければならぬと主張する人々の運動が、その当時頻繁におこなっていた。

第1に、紀元前47年頃、ガリラヤでおこったエゼキアスの運動があげられる。エゼキアスはガリラヤ人ユダの父であり⁷⁶⁾、ヨセフスによると彼は多くの部下をもつ ἀρχιληστής (盗賊の頭目) でシリアに近い辺境で勢力をふるっていたが、その頃がガリラヤに「知事」(στρατηγός) として赴任してきた若きヘロデは彼らを抑えて処刑してしまった⁷⁷⁾。ヨセフスはこの後、ヘロデの裁判なしのエゼキアス処刑は律法を逸脱した行為であったため、ヘロデがサンヘドリンに召喚されたことを伝えている⁷⁸⁾。このサンヘドリン召喚と、またこの記事が親ヘロデ的傾向をもつダマスクスのニコラウスの資料によっていること⁷⁹⁾、さらにその後のヨセフスにおける ληστής という言葉の偏向的使用⁸⁰⁾などから、エゼキアスはヨセフスのような単なる ἀρχιληστής 盗賊の頭目ではなく、民衆の間にはかなりの指導力と影響力をもった人物——おそらく、政治的抵抗を目的としたゲリラ活動の指導者——であったのであろう⁸¹⁾。彼はまた、メシア僭称者であったともいわれている⁸²⁾。

第2に、ヘロデがローマ元老院からユダヤ王に任命されて⁸³⁾パレスチナに戻り、ガリラヤ平定のための戦いをくりひろげていた際の勇敢な老人の反抗についてのエピソード⁸⁴⁾がある。ガリラヤ湖西岸近くのアルベラの洞穴で最後のゲリラ活動を続けていた「盗賊たち(λησταί)」のなかに一人の勇敢な老人とその家族があった。老人は、他の「盗賊たち」と同じく、投降して捕虜になるより死を選んだ⁸⁵⁾。彼はヘロデの助命の申し出を断り、七人の子供と妻とをすべて殺

し、彼らの死体を崖から投げ落してから自らも身を投げた⁸⁶⁾。彼は律法に反するイドゥメア人ヘロデを王として認めたくなかったのである⁸⁷⁾。

第3に、律法に熱心な10人のヘロデ王暗殺未遂事件⁸⁸⁾があげられる。これはヘロデの律法蔑視と彼の強烈なヘレニズム的傾向に対しておこされた事件である⁸⁹⁾。彼らは、父祖伝来の律法に従った習慣が廃されているのが大いなる災いの源であり、ヘロデのヘレニズム的生活様式の強制的導入を耐え忍ぶよりも、むしろ生命を賭けて抵抗することが彼らの聖務であると考えた⁹⁰⁾。しかし、彼らは計画が発覚して捕えられるが、計画を否認することなく、むしろ短剣を示しその計画は敬神から生じたものであり、人々が生命を賭けても守るべき価値ある生活習慣(律法)のためであると告白し⁹¹⁾、あらゆる種類の拷問の苦しみをうけた後殺された⁹²⁾。ヨセフはこの事件が多くの人々によって目撃され、ヘロデはこの人々の毅然とした態度と律法への不屈の熱情に自らの不安を感じさせられたと伝えている⁹³⁾。

第4に、すでに述べた2人の律法教師(σοφισταί)と弟子たちによって神殿大門上の金の鷲の像が引き倒された事件である⁹⁴⁾。ヘロデの死の直前、王の死が誤報として伝わると、40人ほどの若者が金の鷲の像を引きおろし、多くの人目の前で斧で断ち割ってしまった⁹⁵⁾。彼らは王の軍隊に捕えられ、王の前で彼らの行動の理由をたずねられると「父祖の律法の命令である」と平然として答え⁹⁶⁾、「われわれは死後大いなる至福を受けるであろう」と、欣然として死を待ち望んだという⁹⁷⁾。

彼らの殉教は民衆に大きな影響を与えた。ヘロデの死後、父祖の律法と神殿を守ろうとして生きてまゝ火刑に処せられた不幸な人々を哀悼し歎き悲しむ哀歌は、エルサレム全市にひびきわたった⁹⁸⁾という。彼らは復讐のための第一歩として、ヘロデが任命した大祭司を解任し、より敬虔で心の潔い人物を選ぶように要求した⁹⁹⁾。

第5に、さらにその後五旬節の頃、ローマでまだカイサルがヘロデの後継者問題に結論を出す前に、ヘロデの領地を管理するために派遣された皇帝の財務官サピノスとユダヤ人とがエルサレムで衝突した事件である¹⁰⁰⁾。その際、ユダヤ人はローマ人に「どうか退却してほしい。長い年月を経て民族の独立を

回復しようとしている人々の障害とならないように¹⁰¹⁾と訴えている。彼らの蜂起が自由を求めた蜂起であったことは明白であり、イスラエルはヤハウエに仕えるためには自立していなければならないというユダヤ人の民族的信仰¹⁰²⁾から生れた訴えである。

最後に、ガリラヤ人ユダ自身もヘロデの死後ガリラヤのセポリスで少なからぬ人数を集め、王の武器庫を襲って部下たちを武装させ、反乱をおこしている¹⁰³⁾。彼も父エゼキアスと同様に、メシア僭称者であった¹⁰⁴⁾。

以上のような時代の背景も要因となってユダの運動は多くの支持者を得ておこったと考えられるが、ヨセフスはその結末についてはまったく言及していない。われわれは、ユダの運動の最後を使徒行伝5章の“Gamaliel-Rede”においてのみ知ることができる。「人口調査の時に、ガリラヤ人ユダが民衆を率いて反乱を起したが、この人も滅び、従った者もみな散らされてしまった¹⁰⁵⁾」(5, 37)と。

結 論

ガリラヤ人ユダの創設した第四哲学党はおそらくパリサイ派のラディカルな陣営から出発し神の唯一主権と律法への全面的信頼とその遵守において、またその結果必然的に生れる「自由への不屈の熱情」において、すでにパリサイ派とは——もちろん、他の二つの派とも——全く共通点をもたない「かって聞いたことのない」独自のセクト・グループ (*iðia αἵρεσις*) を形成したようである。彼らは律法のためには、自己に対しては死をもいとわず、他者に対しては殺害を含めた武力行使さえいとわなかった。それゆえ、ローマならびにローマに妥協的なユダヤ富裕貴族階級にとっては、彼らは政治的的革命分子と見えたことであろうし、その富裕貴族階級に属していたヨセフスの叙述に偏向的傾向があらわれているのは当然であり、このことはそれ以後のユダヤ独立運動における神と律法に熱心な者たち、すなわち、ゼーロータイやシカリに対しても同様である。

異教の主権者で *divi filius* または *υἱὸς θεοῦ*、時には *θεός* とさえ呼ばれて¹⁰⁶⁾

祭儀の礼拝対象にもなったアウグストゥスの命令による人口調査は、ユダたちの眼にはイスラエルの神の唯一主権への重大なる侵犯と映ったのである。それゆえ、1) そうした人口調査に応ずることは異教主権者を主として認めることになり、それはすなわち、偶像崇拜そのものであり、神と律法に対する重大な背反行為であるとして、さらに 2) 神と律法に対して熱心な者には神は必ずや助力の手を差しのべ、異教主権の駆逐とイスラエルに対する神の唯一主権が確立されるであろうとして、人口調査を拒否して立ちあがった彼らの運動は本質的に宗教的であった。しかし、その蜂起はあくまでイスラエルにおけるローマの主権拒否の性質をもっている以上、当然ストレートに政治的反乱を意味しており、したがって使徒行伝 5, 37 が伝えるようにおし潰されてしまったのである。

彼らの運動は皇帝主権とヤハウエ主権との衝突であり、マカベア家の反乱以降の Hellenismus と Judentum との競合・葛藤・衝突の歴史のなかの突出した一角であったわけで、その後このユダの運動精神は息子や孫を中心に受け継がれてユダヤ独立運動における基盤となったのである。

注

* 本小論は 1977年 3月 30日、京都産業大学で開催された日本基督教学会近畿支部会において口頭発表したものを骨子として、加筆文章化したものである。

なお本注においては Flavius Josephus の著書を次のように略記する。

b=ユダヤ戦記 Bellum Judaicum

a=ユダヤ古代誌 Antiquitates Judaicae

Vita=自伝 Vita

C.Ap.=アピオンへの反論 Contra Apionem

- 1) ヨセフスにおいてガリラヤ人ユダが言及されている 個所は以下のとおりである。
 - b 2, 56 (4 B.C. のヘロデ大王の死後、パレスチナで多くの者たちが王位をねらっておこした騒乱のひとつとしてあげられている エゼキアスの子ユダの蜂起について)
 - b 2, 118 (A.D. 6 の人口調査に反対したユダの反乱について)
 - b 2, 433 (ユダヤ戦争初期のメシア僭称者メナヘムの記述のなかでメナヘムの父としてガリラヤ人ユダを紹介している)
 - b 7, 253 (マサダ要塞でユダヤ人の対ローマの最後の攻防を指揮したヤイルの子でメナヘムの縁者であるエレアザルの記述のなかでガリラヤ人ユダの運動を紹介して

いる)

a 17, 271-272 (b 2, 56の並行記事であるが, b 2, 56より詳細に叙述されている)

a 18, 4-10 (b 2, 118の並行記事であるが, b 2, 118とかなり相違している。ここで第四哲学党について言及している)

a 18, 23-25 (第四哲学党についての性格についての言及)

a 20, 102 (ユダヤ地方総督 Tiberius Alexandros によって磔刑に処せられたヤコブとシモンの父としてのユダの運動が言及されている)

2) 行伝 5, 37.

3) b 1, 1-6. 22 (この他 b 2, 288ff; 3, 108など) cf. M. Hengel, *Die Zeloten: Untersuchungen zur jüdischen Freiheitsbewegung in der Zeit von Herodes I. bis 70 n. Chr., Arbeiten zur Geschichte des Spätjudentums und Urchristentums I*, Leiden/Köln, 1961, S. 11 (以下この書を Hengel と略記する); S. G. F. Brandon, *Jesus and the Zealots: A Study of the Political Factor in Primitive Christianity*, Manchester, 1967, p. 30, n. 3 (以下この書を Brandon と略記する); ヨセフス「ユダヤ戦記 I」(新見宏訳) 東京, 1975, 総説, 21頁.

4) b 1, 10 (この他 b 5, 412; 6, 300) cf. Hengel, loc. cit.; 新見訳「ユダヤ戦記 I」同所.

5) a 1, 5-9. 14-17 (この他 a 16, 175; 20, 259-268) cf. Hengel, S. 12; 新見訳「ユダヤ戦記 I」14頁.

6) a 1, 9. 24; 新見訳「ユダヤ戦記 I」14頁参照.

7) 新見訳「ユダヤ戦記 I」21頁参照.

8) ユダヤ人の思想的潮流とギリシャ哲学とのアナロジーについて, ヨセフスは Vita 12 においてパリサイ派とストア派との類似性を示し (“...τῆ Φαρισαίων αἰρέσει κατακολουθῶν, ἣ παραπλήσιός ἐστι τῆ παρ’ Ἑλλήσι Στωικῆ λεγομένη.”), a 15, 371 においてエッセネ派をピュタゴラス派にたとえている (“γένος δὲ τοῦτ’ [Ἑσσαῖοι] ἔστιν διαίτη χρώμενον τῆ παρ’ Ἑλλήσιν ὑπὸ Πυθαγόρου καταδειγμένη.”). もちろん, これはあくまでアナロジーであって, これらの「哲学派」は, その意味においては哲学の学派ではなかった. 確実にいえることは, サドカイ派やパリサイ派はヨセフスの呼びたいような哲学の学派ではなかった. cf. E. Lohse, *Umwelt des Neuen Testaments*, Göttingen, 1971, S. 51, S. 53; (加山宏路・加山久夫訳)「新約聖書の周辺世界」東京, 1976, 87頁, 91頁.

ユダヤ人の諸哲学派については b 2, 119-166; a 13, 171-173; 18, 11-17. 18-22; Vita 10 に言及されているが, これらは「三つの哲学」(φιλοσοφίαι τρεῖς) (a 18, 11. 22) の言及であり, a 18, 4-10. 23-25においてのみ, これらの「三つの哲学」に「第四の哲学」(ἡ τετάρτη τῶν φιλοσοφιῶν) (a 18, 23) が加えられている. なお, 「第四の哲学」を「第四哲学党」としたのは他の三つの教派 (a 13, 171; Vita 10. cf. b 2, 119) パリサイ派, サドカイ派, エッセネ派と比較して, 運動体の指導

- 者として特定人物(ユダ、ツァドク)が存在し、彼(または彼ら)の指導精神が運動体を一つの党派的存在に統一していることからである。cf. Hengel, S. 87; S. Applebaum, *The Zealots: The Case for Reevaluation*, JRS 61, 1971, p. 161, “Judah’s group was an independent organized sect with a charismatic leadership.”
- 9) b 2, 93, Archelaus (在位 4 B.C.—A.D. 6).
- 10) b 2, 111. ガリアの町ピエンナは現在のウィーン (H. St. J. Thackeray, *Josephus* [Loeb Classical Library] II, Cambridge, Mass., 1927, Reprinted, 1967, p.365 n.c).
- 11) a 17, 355: “...τῆς δ’ Ἀρχελαίου χώρας ὑποτελοῦς προσημεθηθείσης τῇ Σύρων.”
a 18, 2: “...τῆς Ἰουδαίαν προσθήκην τῆς Συρίας.”
- 12) P. Sulpicius Quirinius (在位 A.D. 6–11) (=legatus Augusti pro praetore) cf. New Schürer, I, 357 (New Schürer の略号については以下をみよ)。
- 13) Coponius (在位 A.D. 6–9)。なお legatus を総督, ἐπίτροπος (b 2, 117) を地方総督とした。ヨセフスはユダヤの地方総督には ἐπίτροπος (procurator) を多く用いている (b 2, 117. 169. 220. 247; a 20, 14. 132) が 1961 年にカエサリアで発見された碑銘には Pilatus が praefectus と呼ばれている。cf. J. Vardaman, *A New Inscription which mentions Pilate as “Prefect”*, JBL 81, 1962; New Schürer I, p. 358, n. 22. なお, ユダヤ統治者の称号については Emil Schürer, *Geschichte des jüdischen Volkes im Zeitalter Jesu Christi I*, Leipzig, 1901, 1972² (Hildesheim/New York), S. 455–457 (以下, この書を Schürer と略記する); E. Schürer, *The History of the Jewish People in the Age of Jesus Christ, I* (A New English Edition: Revised and Edited by Geza Vermes and Fergus Millar, Organizing Editor: Matthew Black) Edinburgh, 1973, pp. 358–361 (以下, この書を New Schürer と略記する); Brandon, p. 66 n. 4 を参照。
- 14) a 17, 355; 18, 1–3.
Quirinius の人口調査 (a 17, 355; 18, 1–3; Lk 2, 1–5) については Schürer I, S. 508–543; New Schürer I, pp. 399–427 に詳論がある。とくに New Schürer においては Schürer に含まれている資料の他に 1972 年までの文献を用いての検討がなされている。
- 15) a 18, 4.
- 16) 以上が前文 (a 18, 1–3)。
- 17) ἡ στάσις (18, 9) は第 1 次ユダヤ戦争 (A.D. 66–73/74) をさす。
- 18) 以上が a 18, 4–10。
- 19) “Ἰούδας (δὲ) Γαυλανίτης ἀνὴρ ἐκ πόλεως ὄνομα Γάμαλα.”
- 20) “τις ἀνὴρ Γαλιλαῖος Ἰούδας ὄνομα.”
- 21) “ὁ Γαλιλαῖος Ἰούδας.”
- 22) “Ἰούδας ὁ Γαλιλαῖος.”
- 23) 上記以外のユダ言及箇所においては

a 20, 102, “*Ἰούδα τοῦ Γαλιλαίου*”

b 2, 433, “*Ἰούδα τοῦ καλουμένου Γαλιλαίου*”

である。

- 24) L. H. Feldman, *Josephus IX* (Loeb), Cambridge, Mass., 1965, p. 5, n. f. は上部ガリラヤの町ガマラと混同してはならないといっているが、上部ガリラヤのガマラの所在は以下の地図のいずれにも示されておらず不明。
The Westminster Historical Atlas to the Bible, ed. by G. E. Wright and F. V. Filson, Philadelphia, 1946.
Oxford Bible Atlas, ed. by H. G. May, London, 1962.
The New Israel Atlas, Bible to Present Day, ed. by Zev Vilnay, Jerusalem, 1968.
Carta's Atlas of the Period of the Second Temple, the Mishnah and the Talmud (in Hebrew), ed. by Michael Avi-Yonah and Shmuel Safrai, Jerusalem 1966, 1974².
Atlas of Israel; Cartography, physical Geography, human and economic Geography, published by Survey of Israel, Ministry of Labour, Jerusalem, 1970.
The Macmillan Bible Atlas, ed. by Yohanan Aharoni and Michael Avi-Yonah, New York/London, 1968.
 (上記の *Carta's Atlas...* と *carta's Atlas of the Bible* by Yohanan Aharoni, 1964 のヘブライ語版との合本の英訳)。
 なお、ガリラヤ湖の東の町ガマラ (ユダの出身地) については Schürer I, S. 615f., n. 46 (*New Schürer*, I, p. 495, n. 46); F.-M. Abel, *Géographie de la Palestine*, II, 1938, p. 325; M. Avi-Yonah, *Gamala*, *Encyclopaedia Judaica* vol. 7, Jerusalem, 1972, p. 295; Bezalel Bar-kochva, *Gamla in Gaulanitis*, *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins* 92, 1976, pp. 54-71 を参照。
- 25) S. Klein, *Neue Beiträge zur Geschichte und Geographie Galiläas, Palästina-Studien*, Heft I, Wien, 1923, S. 36, cf. Hengel, S. 337, n. 3.
- 26) b 1, 204; a 14, 159.
- 27) Hengel, S. 337, n. 3: “*der Galiläer*” aus *Gamala in der Gaulanitis*. cf. J. Spencer Kennard, *Judas of Galilee and his Clan*, *JQR* 36, 1945/46, pp. 281-286.
- 28) M. Stern, *History of the Jewish People*, ed. by H. H. Ben-Sasson (in Hebrew), Tel-Aviv, 1969, London/Cambridge, Mass., 1976; 邦訳 (石田友雄訳) 「ユダヤ民族史」2, 古代篇 II, 1977, 138頁。
Gamala はミシュナによればヨシヤの時代に要塞化され (*Arakhin* 9, 6, *The Mishnah* by H. Danby, 1933. p. 553), ヨセフスによれば Alexander Yannai が占領し、ユダヤ人の居住都市となった (a 13, 394)。さらに、第1次ユダヤ戦争の際、ヨセフスによって要塞化され、ユダヤ反乱軍とウェスパシアヌスとの間に激し

い戦闘がおこなわれ、多くの住民が殺されたり、自決した (b 4, 11-54, 62-83).
cf. M. Avi-Yonah, op. cit., p. 295.

- 29) この結論をとるのは上記 M. Hengel (注27), M. Stern (注28) のほか、以下のとおり。
Schürer I, S. 486, "Judas aus Gamala in Gaulanitis, genannt der Galiläer"
(New Schürer I, p. 381).
Brandon, p. 33, n. 3.
Abraham Schalit, Judah the Galilean, Encyclopaedia Judaica, Jerusalem, 1972,
vol. 10, pp. 354-355.
Matthew Black, "Judas of Galilae and Josephus' 'Fourth Philosophy'" in
Josephus Studien: Untersuchungen zu Josephus dem antiken Judentum und dem
Neuen Testament (Otto Michel zum 70. Geburtstag gewidmet) Herausgegeben
von Otto Betz, Klaus Haacker und Martin Hengel, Göttingen, 1974, S. 46.
なお, A. H. M. Jones, The Herods of Judaea, Oxford, 1938, 1967² は Judas of
Gamala, a Town in Gaulanitis (p. 169) と Judas of Galilee (pp. 163, 225,
243) とを理由をあげずに別記している (Index, p. 269). これに近いのが H. St.
J. Thackeray, op. cit., p. 367, n. c. である。
- 30) b 2, 118. 433.
- 31) 注 37) 参照.
- 32) b 1, 648.
- 33) b 1, 650.
- 34) b 1, 650.
- 35) b 1, 655.
- 36) a 17, 149: *οὐστινας ἐξήγηται τῶν πατρίων νόμων.*
- 37) Schürer II, 1907, 1970², S. 375; J. Klausner, Jesus of Nazareth (E. T. New
York, 1953), p. 205; C. Roth, The Historical Background of the Dead Sea
Scrolls, Oxford, 1958, pp. 7, 54, 60, 73; Hengel, S. 90f., 339; G. R. Driver,
The Judaean Scrolls, Oxford, 1965, pp. 251, 473f; Brandon, pp. 32, 36; S.
Zeitlin, The Rise and Fall of the Judaean State, Philadelphia, 1969, vol. II,
p. 131; S. Applebaum, op. cit., p. 160.
- 38) Midrash, Kohelet Rabba, 1, 11. cf. J. Klausner, loc. cit.; Hengel, S. 339.
- 39) Hengel, S. 91. cf. Schürer I, S. 486 (New Schürer I, p. 382); J. Klausner, op.
cit., p. 275; Ch. Guignebert, Le monde juif vers le temps de Jésus, Paris, 1935,
1952², p. 222; R. T. H. Shutt, Studies in Josephus, London, 1961, p. 120;
E. Lohse, op. cit., S. 58 (邦訳, 99頁); H. Paul Kingdon, The Origins of the
Zealots, NTS 19, 1972/73, p. 80, n. 2.
- 40) cf. Brandon, p. 38.

- 41) cf. H. St. J. Thackeray, *op. cit.*, Introduction p. xii; 新見訳「ユダヤ戦記 I」12 頁.
- 42) Vita 2. 198; b 3, 352; C.Ap. 1, 54. cf. I代 24, 7-18. I マカ 2, 1. 14. Vita 3f. によれば彼の曾祖父の祖父マタティアスは大祭司ヨナタンの娘と結婚している.
- 43) Vita 12.
- 44) b 1, 10; 2, 391-4. 397-401. 445. 449. 525. 529. 538, 540; 5, 28. 53. 265. 333f.; a 18, 8f. 25; 20. 166ff. 252-258. cf. H. St. J. Thackeray, *Josephus: The Man and the Historian*, New York, 1929, p. 4; Hengel, S. 11, 15; Brandon, pp. 31, 110, 129f.; M. Grant, *The Jews in the Roman World*, New York, 1973, p. 90,
- 45) ゼーロータイまたはシカリの出発点がガリラヤ人ユダの第四哲学党であると考えるのは定説（とくに Schürer 以降）である。
H. Graetz, *Geschichte der Juden*, 5 Aufl., M. Braun, Leipzig, 1900-05, III, i. 250, 258; ii, 431f., 458ff.
J. Jost, *Geschichte des Judentums und seiner Secten*, Leipzig, 1857, S. 327, 436, 443.
J. Derenbourg, *Essai sur l'histoire et la géographie de la Palestine*, I, *Histoire de la Palestine*, Paris, 1867, p. 195n. 2, pp. 238f., pp. 260f., pp. 472f.
Schürer, I. S. 486f., 573ff. など.
H. St. J. Thackeray, *loc. cit.*
R. H. Pfeiffer, *History of New Testament Times*, New York, 1949, p. 35.
J. Klausner, *Historia shel habayit ha sheni* (in Hebrew), 5 vols, Jerusalem, 1950. とくに vol. 4, pp. 200ff. など.
C. Roth, *The Zealots in the War of 66-73*, JSS. 4, 1959, pp. 333ff.
S. Zeitlin, *Zealots and Sicarii*, JBL 81, 1962, p. 396; ders., *The Rise and Fall of the Judean state*, vol. II (37 B.C.E.—66 C.E.), 1969, p. 131.
Hengel, S. 86ff, 238.
Brandon, pp. 31-40, 52-54, 111, n. 3.
Y. Yadin, *Masada, Herod's Fortress and the Zealots' Last Stand*, London/Jerusalem, 1966.
S. Applebaum, *op. cit.*, pp. 166, 170.
H. Paul Kingdon, *op. cit.*, p. 80.
M. Grant, *op. cit.*, pp. 90, 299f., n. 21.
これらに対してゼーロータイまたはシカリと第四哲学党とを一致させないのは,
F. Jackson and K. Lake, *The Beginnings of Christianity*, Part I, vol. I, *Prolegomena I*, pp. 421ff.
G. Moore, *Fate and Free Will in the Jewish Philosophies according to Josephus*, HThR 22, 1929, p. 373.

- M. Smith, *Zealots and Sicarii: Their Origins and Relation*, HThR 64, 1971, p. 5, n. 34, 18.
- 46) cf. Brandon, pp. 37f.; M. Black, op. cit. pp. 50f.
- 47) a 20, 267: Domitianus 帝治世の第13年 (A.D. 93/94).
- 48) Titus Flavius Vespasianus (A.D. 9-79, 在位 69-79); Flavius Vespasianus Titus (A.D. 39-81, 在位 79-81).
- 49) Hengel, S. 7, 10f. Hengel は「戦記」が Vespasianus と Titus の命令で書かれたであろうと考えている (S. 10). なお, ヨセフスによれば, 「戦記」は Vespasianus と Titus に捧げられている (Vita 361; C.Ap. 1, 50).
- 50) a 1, 5. 15 (cf. a 16, 175). cf. Hengel, S. 12, n. 15.
- 51) a 16, 186f; 19, 329 ff.; 20, 100. 143f. 218 など. これに対して, 「戦記」では, 例えば b 5, 45ff. においては, ユダヤ地方総督 Tiberius Alexandros は肯定的評価をうけている.
- 52) Brandon, p. 37, n. 2 には, パリサイ派との関連性についての詳細な紹介がなされている. cf. R. Meyer, “*Φαρισαῖος*.” Kittel, *Theological Dictionary of the N. T.* (E. T.), vol. 7, 1971, pp. 26-28.
- 53) Brandon, p. 38; M. Black, loc cit. M. Black はこの Brandon の見解を説得力ある説明であるとして「戦記」の偏向性を指摘している.
- 54) cf. 出エ 20, 3; 申命 5, 7; 6, 15; II 王 17, 35; エレ 25, 6; 35, 15.
- 55) Hengel, S. 102.
- 56) 注 45) 参照.
- 57) cf. Hengel, S. 114-120; P. Winter, Review of M. Hengel, *Die Zeloten*, *Revue de Qumran* 4, 1963, p. 112; Brandon, pp. 47ff. “the Zealot ideal of Yahweh’s sovereignty inevitably involved resistance, as a religious duty, to the Roman government which treated Judaea as a possession of the emperor and the state of Rome. Hence the census and the tribute were seen as tokens of an impious slavery, against which it was the sacred duty of every loyal Jew to resist.” pp. 48f.; M. Smith, op. cit., p. 5
- 58) a 18, 23, “μόνον ἡγεμόνα καὶ δεσπότην τὸν θεὸν ὑπειληφόσιν.”
- 59) “*θεοκρατίαν ἀπέδειξε τὸ πολίτευμα, θεῷ τὴν ἀρχὴν καὶ τὸ κράτος ἀναθεῖς.*” (C.Ap., 2, 165).
- θεοκρατία* について 「リデル・ジョーンズの『希英大辞典』にはこの語の他の引用箇所を挙げていないから, ヨセフスの造語であるように思われる。神のみがイスラエルの真の統治者であるという思考はもちろん旧約に共通である。」(秀村欣二ほか編「原典新約時代史」東京, 1976, 639頁, 注 2) cf. H. St. J. Thackeray, *Josephus I* (Loeb), p. 358, n. (a); Brandon, p. 47, “patriots (Zealots) who sacrificed themselves for their ideal of Israel as a theocracy under Yahweh”; p. 48, n. 2,

- “Josephus also seems to have been the first to use the term ‘theocracy,’”
 “...Israel as a theocracy, with the high priest as vicegerent...”.
- 60) “...τῶ ἀσυνήθει πρότερον φιλοσοφίας.” (a 18, 9).
- 61) “ἡ τῶν πατρίων καίνισις καὶ μεταβολὴ μεγάλαις...” (a 18, 9).
- 62) 民数 1, 2-3 .45-46, 民数 1, 45-46 によれば, 女・子供・レビ人を除いて, 20才以上のイスラエルの男子は603,550人であった (cf. 民数 2, 32, 出エ 38, 26).
- 63) 民数 26. 2, 51, 民数 26, 51 によれば, 601,730人であった。この第2回目の人口調査は土地分配の目的をもっていた (民数 26, 52-56)。
- 64) cf. Hengel, S. 134.
- 65) 出エ 30, 12-13.
- 66) 出エ 30, 12.
- 67) 出エ 30, 15. cf. Hengel, S. 134. 集められた金 (あがないの銀) は会見の幕屋の用にあてられた (出エ 30, 16, cf. 38, 24-26). これは後に神殿税 (半シケル税) となった。これについては Schürer II, S. 314ff. を参照。
 マタ17, 24, τὰ δίδραχμα 「宮の納入金」. δίδραχμον (2ドラクマ) はユダヤ人には半シケルに相当した。W. Bauer, A Greek-English Lexicon of the NT and Other Early Christian Literature (E. T.), Chicago, 1952⁴, p. 191.
- 68) II サム 24, 1-9. cf. I代 21, 1-6.
- 69) II サム 24, 10-17. cf. I代 21, 7-17.
- 70) 創世 22, 17. cf. 創世 15, 5.
- 71) ホセ 2. 1 (日本聖書協会訳: 1, 10).
- 72) Hengel, S. 135.
- 73) イスラエルの民がもつ以上のような人口調査に対する感情を意識してか, または知らずにか, ヨセフスによると, 第1次ユダヤ戦争直前にシリアの総督 Cestius Gallus が祭司長たちに命じた人口調査は, 過越祭の際に神殿で捧げられた過越の小羊の数による間接的調査であった (b 6, 422ff.). ユダヤ人が3大祭のなかでもとくに過越祭にエルサレムに詣でることを利用したのである。ヨセフスは255,600頭が犠牲に捧げられたことから, 1頭に対して平均10人が食卓につくとして, 2,700,000人と報告している (b 6, 424f.). もちろん, これは計算ちがいであり実際は2,556,000人となる (H. St. J. Thackeray, Josephus III [Loeb], p. 499, n. (a). cf. J. Jeremias, Jerusalem in the Time of Jesus (ET), 1969, p. 57).
- 74) レビ 25, 23 「地は永代に売ってはならない。地はわたしのものだからである。」詩篇 24, 1 「地とそれに満ちるもの, 世界と, そのなかに住む者とは主のものである。」さらに, ヨシ 22, 19 「主の所有の地」 (cf. 22, 25). 土地が神の遺産 (嗣業) であることについては, I サム 26, 19; II サム 14, 16; エレ 2, 7; 16, 18; 詩篇 68, 10 (日本聖書協会訳: 68, 9); 79, 1 参照。
- 75) G. von Rad, Theologie des Alten Testaments, I, 1957, S. 298. cf. Hengel,

S. 138.

- 76) エゼキアスをガリラヤ人ユダの父とする考え、すなわち、ヘロデ死後ガリラヤのセポリスで反乱をおこしたエゼキアスの子ユダ (b 2, 56; a 17, 271) とガリラヤ人ユダ (b 2, 118; 7, 253; a 18, 4. 23; 20, 102; 行伝 5, 37) とを同一人物とする考えは Schürer 以来、多くの人々によって認められている。

H. Graetz, *op. cit.*, S. 250, 258.

J. Wellhausen, *Israelitische und jüdische Geschichte*, Berlin, 1894, 1958⁹, S. 353.

O. Holtzmann, *Neutestamentliche Zeitgeschichte*, Tübingen, 1895, 1906², S. 55.

Schürer I, S. 486 (*New Schürer I*, p. 381).

G. Hölscher, *Geschichte der Israelitisch-Jüdischen Religion*, Gießen, 1922, S. 227.

A. Schlatter, *Geschichte Israels von Alexander dem Großen bis Hadrian*, Stuttgart, 1925³, 260f.

R. Eisler, *ΙΗΣΟΥΣ ΒΑΣΙΛΕΥΣ ΟΥ ΒΑΣΙΛΕΥΣΑΣ*, Heidelberg, II, 1929-30, S. 69, n. 3.

R. H. Pfeiffer, *op. cit.*, p. 35, 59.

J. Jeremias, *Jerusalem zur Zeit Jesu*, II, 1924, S. 13, 147 (ET: *Jerusalem in the Time of Jesus*, 1969, p. 277).

J. Klausner, *op. cit.*, p. 200,

—, *Jesus of Nazareth*, 1925, pp. 156, 162, 207.

J. S. Kennard Jr., *op. cit.*, pp. 281ff.

W. O. E. Oesterley, *A History of Israel*, II, Oxford, 1932, 1951², p. 366.

F. M. Abel, *Histoire de la Palestine*, Paris, 1952, I, p. 423.

H. Braunert, *Der Römische Provinzialcensus und der Schätzungsbericht des Lukas-Evangeliums*, *Historia* 6, 1957, S. 213.

C. Roth, *The Historical Backgrounds of the Dead Sea Scrolls*, 1958, pp. 6f.

—, *Zealots in the War of 66-73*, *JSS* 4, 1959, p. 338, n. 1.

Hengel, S. 337f.

Brandon, pp. 28f., 53.

Bo Reicke, *Neutestamentliche Zeitgeschichte*, Berlin, 1968², S. 83.

A. Schalit, *Hezekiah*, *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem, 1972, vol. 8, p. 455.

—, *Judah the Galilean*, *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem, 1972, vol. 10, p. 354.

S. Applebaum, *op. cit.*, p. 159.

M. Grant, *Herod the Great*, New York, 1971, pp. 38, 221.

M. Black, *op. cit.*, p. 47.

M. Stern, *op. cit.*, pp. 138, 157.

これらに対して、エゼキアスの子ユダとガリラヤ人ユダとを異った人物とまたは否定的に考えるのは、

G. Dalman, *Worte Jesu*, Leipzig, 1892, S. 112f.

F. Jackson and K. Lake, *op. cit.*, I, p. 424 (cf. F. Jackson, *Josephus and the Jews*, 1930, p. 265, n. 1).

E. Meyer, *Ursprünge und Anfänge des Christentums II*, Berlin, 1921, S. 403, n.

1. H. St. J. Thackeray, *Josephus II*, (Loeb), p. 367, n. (e).

M. Lagrange, *Le Judaïsme avant Jésus-Christ*, Paris, 1931³, p. 213, n. 1.

77) b 1, 204; a 14, 159.

78) b 1, 210; a 14, 167. このサンヘドリン召喚にヘロデは軍隊と共にのぞんだ (a 14, 171). ヘロデはこのサンヘドリンでの裁判の件をうらみに思つて (b 1, 214), 後にヒルカヌス II とサンヘドリンの親ハスモニア系議員を殺害した (a 14, 175).

79) H. St. J. Thackeray, *op. cit.*, Introduction, p. xxii. 新見訳「ユダヤ戦記 I」, 総説, 22頁.

80) K. H. Rengstorf, “*ληστῆς*,” *Kittel, Theological Dictionary of the New Testament*, vol. 4 (E.T., 1967), p. 258: “In Josephus it (*ληστῆς*) is constantly used for the Zealots.” Cf. A. Stumpf, “*ζηλωτής*,” *Theological Dictionary of the New Testament*, vol. 2, (E.T., 1964), pp. 884f.; C. Roth, *op. cit.*, pp. 332f., n. 2; Hengel, S. 41, 42-47 (とくに 43, 46, 47); S. Zeitlin, *Zealots and Sicarii*, *JBL* 81, 1962, p. 396; Brandon, pp. 36, 45, 55, 78, 105f, 108f, 112, 127; Marc Borg, *The Currency of the Term ‘Zealots’*, *JTS* 22, 1971, pp. 505f; S. Applebaum, *op. cit.*, p. 163; H. Paul Kingdon, *op. cit.*, p. 80; S. B. Hoenig, *Qumran Fantasies*, *JQR* 63, 1972/73, p. 249.

前述したように、ヨセフスは「戦記」において、ゼーロータイやシカリガ、ローマに対する反乱を企て、その結果、エルサレムとその神殿の破壊・崩壊をもたらし、ユダヤ民族を最大の危機に陥れた張本人であり、彼らはヨセフスにとって、ユダヤ人の不幸の元凶としての犯罪者でしかなかった。それゆえ、彼らを実際の盗賊・略奪者と区別せずに *ληστῆς* と呼んで蔑視した。その意味で「戦記」は彼らに対するヨセフスの一大告発書である。

81) cf. J. Klausner, *op. cit.*, p. 141; A. H. M. Jones, *The Herods of Judaea*, Oxford, 1938, 1967, p. 29; K. H. Rengstorf, *loc. cit.*, “Hezekiah was not a bandit but a political revolutionary, perhaps with Messianic aims”; Hengel, S. 319-22; Brandon, p. 28; S. Applebaum, *op. cit.*, p. 159; M. Grant, *op. cit.*, p. 38, “Ezekias (Hezekias) was a nationalistic, underground political agitator, and in some circles a national hero in the tradition of Judas Maccabaeus himself”; H. Paul Kingdon, *op. cit.*, p. 79; M. Black, *op. cit.*, p. 47.

エゼキアスの運動はその子ガリラヤ人ユダの運動と共に、ガリラヤ人の人々が熱烈

な親ハスモニアで、親ローマのイドゥメア人ヘロデによる統治に反対した背景をもっている (cf. M. Grant, loc. cit.).

- 82) エゼキアスのメシア的解釈については、H. Greßmann, *Der Messias*, 1929, S. 458f.; R. Meyer, *Der Profet aus Galiläa*, 1940, S. 73ff.; S. Mowinckel, *He That Cometh* (E.T.), 1956, p. 284 らによって主張されている。

ラビ伝承によれば、エゼキアス (ヒゼキア) はヒレルによってメシアと認められている (Babylonian Talmud, Sanhedrin, 98b, 99a)。なお G. F. Moore, *Judaism*, II, p. 347, n. 2 はこのヒレルはイエスと同時代人であった有名なラビ、ヒレルではなく別人であるとしている。また、タルムード記者はこのヒゼキアがユダヤ王ヒゼキアであるとしている。しかし、S. Mowinckel, op. cit., p. 284, n. 6 は H. Greßmann の考えるガリラヤ人ヒゼキア説 (op. cit., S. 449ff.) を正しいとしている。さらに3世紀の伝承によると、Rabban Yohanan Ben Zakkai は死の直前に、ヒゼキアのメシア性を述べている (Jerusalem Talmud, Sota 24c, 29f.)。cf. H. Strack und P. Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, München, I, S. 30; P. Volz, *Die Eschatologie der jüdischen Gemeinde im neutestamentlichen Zeitalter*, Tübingen, 1934², S. 206f; Hengel, S. 297f., n. 3.

- 83) b 1, 284. 40 B.C.

- 84) b 1, 312-3; a 14, 429-430.

- 85) “*θάνατον πρὸ δουλείας ὑπομένων*” (a 14, 429)。この奴隷より死を選ぶ殉教精神はその後のゼーロータイ運動にくりかえしあらわれ、その最大の例が A.D. 73/74 におけるマサダでのシカリたちの集団自殺である。

マサダにおける7カ月にわたる最後のユダヤ人の抵抗については b 7, 252-406 に詳細に報告されている。マサダにおける最後の攻防を指揮したのはガリラヤ人ユダの子孫で、メナヘムの縁者であったアリの子エレアザル (b 7, 253. 275; なお b 2, 447 ではヤイルの子となっている) であるが、敗北の覚の辞世の歌 (Hengel, S. 269, n. 5) ともいふべきエレアザルの二つの演説が b 7, 252-406 に含まれている (b 7, 323-336; 7, 341-388)。もっとも、この“Eleazar-Reden”は古代の歴史叙述の慣習に従った一種の創作品である (Hengel, loc. cit.) が、単なるフィクションではなく、おそらくヨセフスはローマでマサダ攻撃の総司令官 Flavius Silva からの戦況報告を読んだものと考えられる。エレアザル・ベン・ヤイルは演説する。「われわれはローマ人のみならず神以外の他のいかなる者にも仕えまいと決心した。なぜなら神一人が人間の真の正しい主であるからである。夜明けにわれわれを待っているのは捕縛である。しかし、われわれにはまだ、高貴に死ぬ自由が選択できる。手に手をとって死ぬことが、妻と子を恥辱と奴隷の状態から守る道である。死こそが魂に自由を得させる。われわれの律法がこれ (自殺) を命じている。われわれの妻と子もそれを願っている」(b 7, 323. 326. 334. 344. 387)。

Masada については Y. Yadin, *The Excavation of Masada—1963/64, Preliminary Report*, IEJ 15, 1965, pp. 1–120; Masada: Horod's Fortress and the Zealots' Last Stand, 1966 を参照。"Eleazar Reden" については, O. Bauernfeind und O. Michel, *Die beiden Eleazarreden in Jos. bell. 7*, 323–336; 7, 341–388, ZNW 58, 1967, S. 267–272 参照。

- 86) b 1, 313. M. Black, op. cit., pp. 46f. はこの勇敢な老人のエピソードのなかに「第四哲学党」の根本的テーゼをみている。
- 87) Hengel, S. 268.
- 88) a 15, 281–291.
- 89) Hengel, S. 263.
- 90) a 15, 281–283.
- 91) a 15, 284–288.
- 92) a 15, 289.
- 93) a 15, 290–291.
- 94) b 1, 648–655; a 17, 149–159.
- 95) a 17, 155; b 1, 651.
- 96) b 1, 651–653; a 17, 156–159.
- 97) b 1, 653.
- 98) b 2, 5–6.
- 99) b 2, 6–7.
- 100) b 2, 42ff.; a 17, 254ff.
- 101) b 2, 53, "τὴν πάτριον αὐτονομίαν"
a 17, 267, "ἐλευθερίαν τὴν πάτριον"
- 102) Brandon, p. 28 (cf. p. 47).
- 103) b 2, 56; a 17, 271.
- 104) a 17, 272, "ἐπιθυμία μειζόνων πραγμάτων καὶ ζηλώσει βασιλείου τιμῆς." ヨセフスは a 17, 272 において, ユダの出現に際して王位に対する熱望を述べているが, 並行記事の b 2, 56 では明確には述べていない。
行伝 5, 37 の "Gamaliel-Rede" において, 明らかにメシア運動であった原始キリスト教団と同列においてユダの運動に言及していることから, ユダの運動がメシア的傾向をもっていたことがわかる (cf. S. Mowinkel, op. cit., p. 284; Hengel, S. 299; Brandon, p. 18, n. 3).
- 105) "...ἀνέστη Ἰούδας ὁ Γαλιλαῖος ἐν ταῖς ἡμέραις τῆς ἀπογραφῆς καὶ ἀπέστησεν λαὸν ὀπίσω αὐτοῦ· ἐκεῖνος ἀπώλετο, καὶ πάντες ὅσοι ἐπέιθοντο αὐτῷ διεσκορπίσθησαν."
- 106) cf. E. Stauffer, *Jerusalem und Rom im Zeitalter Jesu Christi*, Bern, 1957.
荒井献訳「エルサレムとローマ：イエス・キリストの時代」東京, 1965, 46頁；

Hengel, S. 105; 秀村欣二ほか編「原典新約時代史」, 1「ローマ帝国」B, 「ローマの皇帝礼拝」36頁(秀村欣二).

ローマの硬貨には皇帝名と共に, 「神」が称号として用いられているものもある. 例えば, ティベリウス帝治世第14年(A.D. 27-28)にアレクサンドリアで鑄造された硬貨の表にはアウグストゥス帝の肖像と共に, *ΘΕΟΣ ΣΕΒΑΣΤΟΣ* (崇敬すべき神)の銘が入っている. また裏面のティベリウス帝の肖像と共に, *ΤΙΒΕΡΙΟΣ ΚΑΙΣΑΡ ΣΕΒΑΣΤΟΣ* の銘が入っている. 両皇帝は光を放った王冠をかぶり神として示されている. 上掲「原典新約時代史」第1編, 2-2「貨幣の刻文」(蛭沼寿雄), 128頁参照.

(梅花女子大学講師)